論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	甲　第　1203　号	氏　　名	小　沢　陽　子
論 文 審 査 担 当 者	主　　査　　小　泉　知　展 副　　査　　菅　野　裕　幸　・　関　島　良　樹		

（論文審査の結果の要旨）

IgG4 関連疾患（IgG4-rerative disease：IgG4-RD）とサルコイドーシス（サ症）はいずれも様々な臓器に病変を呈する全身疾患であり、両疾患とも胸部 Computed Tomography（CT）では両側肺門リンパ節腫脹（bilateral hilar lymphadenopathy：BHL）を呈することが多く、肺病変はリンパ路沿いに進展する。また、fluorine-18 fluorodeoxyglucose positron emission tomography（FDG-PET）では高率に肺門リンパ節に FDG 集積を認める。両疾患において、BHL を呈し、FDG-PET を施行した症例を集め、FDG 集積の程度と分布に関して比較検討を行った。

対象は当院で診断された IgG4-RD で BHL を伴う 25 例と、病理学的にサ症（病期 I-II）と診断された 15 例である。全例が相澤病院で FDG-PET 検査を施行された。臨床情報、FDG 集積分布、肺門リンパ節の FDG 最大標準化取り込み値（SUVmax）について比較検討した。

その結果、下記の結果を得た。

1、 IgG4-RD 群はサ症群に比して有意に男性が多く高齢であった。血液検査では、血清 Cr、CRP、IgG、可溶性 IL-2 レセプター、白血球数、好酸球分画（数）が IgG4-RD 群で有意に高値、サ症群では ACE が有意に高値であった。

2、 IgG4-RD 群では涙腺、顎下腺、膵臓、前立腺、尿道周囲および動脈周囲領域で有意に高率な FDG 集積を、サ症群では、鎖骨上および腹部のリンパ節、筋肉や軟部組織において有意に高率な FDG 集積を認めた。

3、 肺門リンパ節の SUVmax は IgG4-RD 群（中央値 4.20）よりもサ症群（中央値 7.20）で有意に高値であった。

これらの結果により、両疾患は肺のリンパ路沿いに病変が進展し、高率に BHL を呈するが、FDG の集積分布と肺門リンパ節の SUVmax には有意な違いが認められた。両疾患の病因と病態の違いが、FDG の集積分布と強度に影響していると考えられた。

従って、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。